

殉教



隣に寝転がる東樹（とうき）は暗闇の中でスマホをいじっている。白く浮かぶ液晶のせいで、彼の指先まで青く透けていた。ダブルベッドで二人並んで眠っていれば、僅かな振動もしっかりと体に伝わってくる。なにしてるの、と、問うより先に彼の手の中の電話が震え出した。あの薄い液晶の本来の姿は電話であることを忘れていたので、本来の役目を果たしているのを見ると少し戦く。私は自然と息を殺した。なんとなく、私が起きているのを悟られてはならない気がしたので。

東樹は電話に出るか迷ったように少しだけ首を動かし、私の方を伺うようにした。タオルケットが彼の方に僅かに引かれたが、私は身じろがないように固まる。彼は体勢を戻して通話をタップする。、目をつぶっていても想像は難くない。

「もしもし」

声を落とし、まるで吐息だけで話そうとしているかのような声だった。

「うん？ うん。となりで寝てる。うん。大丈夫」

電話の主は私の存在を知っているらしい。ということは私も知っている相手だろうか。そっと耳を澄まし、話相手が誰なのかを当てることにただただ集中する。あいにく、電話口から向こうの声は聞こえない。

「は、はは、そうなんか？ 今メールしようと思ってたのに。うん。そうそうアイーダが。うん」

彼が暗闇でスマホを触っていたのは相手にメールを送るつもりだったのか。女か。男か。どちらだろう。彼は私の思案をよそにアイーダの話が続けている。

アイーダは彼の大学の先輩だ。赤井田という名前が元でついた女のようなあだ名に似合わず、本人は色黒でヒゲヅラの筋肉ムキムキのスポーツマンだ。私も何度か会ったことがあるし、気さくで面白い人だった。彼が話題になるということは、アイーダのことも知っている人だろうか。単純に考えて、アイーダや彼の大学時代の友人か。気さくな話し方からすれば男友達といったところか。友人の人数が片手で事足りそうな私と違い、東樹は両手両足の指でも足りないだろう。そのぐらい、私は彼から友人をたくさん紹介された。男も、女も、それはもうたくさん。もし、仮に、今誰と電話しているのか尋ねて東樹が教えてくれたとして、私が知らない人である可能性も存分にある。

「うん？ そうだな。アイーダにも連絡してみっか。うん。お前から連絡する？ あそう。はあ？ んなわけねーだろばーか」

吐息だけの声が、確かな響きを持つ。私が隣で寝ていることを忘れていいのか。彼が「お前」と呼称するなら男なのだろう。東樹は私のことも他の女の子のことも一度も「お前」なんて呼ばない。ほっとする。浮気ではないだろう。そもそも東樹は浮気なんかできる玉じゃない。真面目で、付き合い始めたのも東樹が私を好きだと言ってくれたからだった。絶対大切に作るから、と、歯の浮くようなセリフを真っ赤にしていった彼の姿は今でも思い出せる。社会人になって、恥ずかしがりながらも目いっぱい告白してくれたのが嬉しくて付き合うことにした。自慢じゃないが、東樹は私のことが好きだ。浮気をするはずがない。二度、こっそりと見たメール受信履歴も着信履歴も、ほとんど男友達ばかりで、女の子の名前は一か月に一回あるかないかだった。女の影がない。

息を必死に殺して胸に力を入れているのも疲れた。寝よう。力をふっと抜くと、嘘みたいに体が軽くなる。自然に漏れる寝息が自分の耳をくすぐった。東樹は気付かなかっただろうか。私が本当に眠っているのなら、しているはずの寝息が、今から始まったことを。鼻の奥からタオルケットをくすぐってかすかな音を立てるこの空気の動きを。

「浮気なんかしてねーよ。南（みなみ）一筋なの、俺は」

私の名前が呼ばれたことにはとしながら、くすぐったさが眠い頭を巡る。気持ちよく眠れそうだった。

「すねんなよ、好きだって。好き好き」

何かが違う。眠気に支配されながらも、違和感が少し頭をもたげる。瞼が重くて開かない。彼の声は低く小さい。私の寝息に交じって彼の声が紡ぐ言葉が聞こえる。

「お前にはいつも悪いと思ってるよ。好きだよ、ちゃんと、好きだよ。うん。また、土曜日な。おやすみな。柳」

「南ちゃん」

約束の時間を三十分過ぎたところで、彼はやってきた。私はカフェオレをぐいっと煽る。お酒でも飲まないと言われても、私はお酒が飲めないのに、カフェオレでどうにか酔えるように祈るしかない。

柳くんは人目を引く。身長は180センチ超え、イタリア人と日本人のハーフという顔は作り物のように美しい。意志の強そうな濃い眉毛と、純粹そうな本物のウォールナツツ色の瞳。健康的でエキゾチックな褐色の肌の鼻筋には、そばかすが散っていた。髪の毛は天然のパーマらしい。こげ茶色の毛はふわふわとしている。その見た目を存分に活かして、モデルを生業としている彼は、標準的な日本人がうようよしている場所には全くそぐわない。彼の周りだけが金色のヴェールに包まれたようで、店内に入ってきた瞬間に回りの客がはっと顔をあげる。長身のおかげなのか店内のパーティション代わりに使われている植木の影に隠れるようにして座っていた私をいとも簡単に見つけ、長い足で颯爽と歩いてくる。隣のテーブルの女二人がご多分に漏れずに柳くんに見入っていた。そりゃ私も、この人のことを全然知らないで、隣のテーブルに来たのなら同じような反応をしていた。柳くんと会ったとき、四回目まではそういう反応をしていたはずだ。モデルをしている知り合いができたことも誇らしかった。でも、五回目の今日、私はうまく彼を見る自信がなかった。

「ごめんね、中々仕事のキリつかなくて」

「ううん、いいの。忙しかったでしょ。呼び出しちゃってごめんね」

「いやいや。どうしたの？」

「いや、うん、まあ、座ったら？ 柳くん目立つし。飲み物どうする？」

「はは、ごめん、ありがと」

こんなに日本人離れした顔をしているのに、口からは流暢な日本語が流れ出る。私の小さな嫌味さえ、彼の爽やかさの前では無力だった。

彼はウッドチェアに腰掛け、窮屈そうに足を組んだ。ブレンドを注文すると女性の店員が彼を意識して少し恥ずかしそうにして下がっていく。私は二杯目のカフェオレを頼んだが、ちゃんと聞いていただろうか。

「いつぶりだろ？ 船津の誕生日祝いしたときからだから三月ぶりかな？ 南ちゃんも東樹も元気？」

うそつくんじゃねえよ、と心の中で罵る。どの口が言うのだ。

「うん、元気だよ。でも、今週の土曜日に柳くんのところ遊びに行くって言ってたよ？」

柳くんは顔色一つ変えず、声を震わせることもない。

「あ、そうだった！ すっかり忘れてた。部屋、汚ねえや」

「忙しいんだね」

「そんなことはないよ。南ちゃんは、今日は休み？」

「うん、最近ずっと働きづめだったからたまにはね」

彼に「ちょっと話がある」と連絡してから、いてもたっていられなくて落ち着かなくて、とうとう有給を取っただなんて口が裂けても言えない。

「そういえば最近柳くんのこと、雑誌で見かけるよ。やっぱりカッコいいよね」

「ほんと？ 嬉しいな！ 友達の彼女に褒められるのって、男として勝ってる気がする」

柳くんのまぶしい笑顔が憎々しい。不快だ。何が友達だ。一昨日の電話で、東樹に何回好きって言わせてたんだ、お前。私はただこわばらせた笑顔で、彼の色素の薄い瞳を見つめた。私は女で、相手は男だけど、そんな性差なんてどうでもよいぐらい目の前の「恋敵」の首元を締め上げて殴り倒して別れろと罵倒したい。でも大人だからしない。公衆の面前だからしない。

お互いの飲み物が出てくるまで、仕事の話や、柳くんと最後に会った、彼や東樹の友人の船津くんの誕生日パーティーの話なんかをした。

柳くんは会話がうまい。コミュニケーション能力が高いというのだろうか、彼を苦手とする人も、彼が苦手とする人もいないのではないか。彼と、例えば天気の話なんかをしても、とても内容のある話で大切なことを語っているような気になってくる。聞き方がうまいのだ。今までの私だったら、本当に大切なことを語っている気になっていたに違いない。でも、認識を改めた私は、柳くんの愛嬌のある笑顔が、本心を隠すための分厚い仮面に見え始めた。今までこんな笑顔とは言えないような顔をして私と話していたのだろうか。

柳くんはブレンドが運ばれてくるとごく自然に一口飲み——これがまた絵になるのだから憎い——、穏やかな表情でこちらをまっすぐ見る。半分外国人である生まれの所為なのか、彼は遠慮なく相手の目を見つめるのが常だった。ほとんどの女性は彼の甘いまなざしの虜になるに違いない。優しい彼氏特集が組まれたら絶対に柳くんも取り上げられるだろう。私の指が僅かに震える。だからって人の彼氏に恋慕していいわけじゃない。

「東樹と喧嘩でもした？」

不意の問いだった。

「え？」

「いや、東樹とは連絡とることはあっても、南ちゃんから連絡もらえるなんて中々ないから、嬉しかったけどなんかあったんかなってすごい心配になってさ。連絡先、交換しといてよかったよ」

彼は依然として穏やかな顔で、目だけで問うてくる。天使がいるならこんな瞳をしているのかもしれないと思わせる、透けた瞳で、私の心の奥底も読もうとしているのだろうか。これから私の言おうとしていることが本当にわからないのか。

「あ、ううん、喧嘩じゃないんだけど……」

「言いにくい？ 俺、全然ひいたりしないよ。口も堅いとは思うけど」

本当に、わからないのか。彼の、きっちりと着こなされたマドラスチェックのシャツの第一ボタンをじっと見つめた。良い形の襟は、彼の綺麗な首筋や咽喉仏と相まってそこだけで絵になる。

「……うん、そのことはね、ちゃんとわかってる。だから、柳くんを呼んだんだし」

彼の口が堅いとか、心が広いとかそんなことは別にどうでもよかった。彼が東樹の浮気相手じゃなかったら、そもそも彼に連絡など取らなかった。電話帳に登録された「柳ステファノ」のアンバランスな字面を見つめることなどなかった。

「……それで？ 話したくないなら別に、無理に話さなくてもいいよ」

彼のそばかすがひくりと動く。

「……東樹、のことなんだけどさ、」

深呼吸をする。

「あの、すみません」

隣のテーブルから不意に声がかかる。彼ははっと顔を引き締め、私は反射的に俯く。隣のテーブルの女性二人がはにかんで傍に立っていた。手には携帯を持っていて、大体何がしたいのかは想像がつく。私は心がずんと下に落ち込んでいくのを感じる。

「モデルのステファノさんですよね？ お写真とってもらえませんか？」

「あー……」

柳くんは困ったように私を見た。彼女たちも私を彼の恋人だと勘違いしているのか、ちらちらとこちらを窺っている。どうせ私が柳くんの恋人だったら自分だって可能性があるかもしれないとか思っているんだろう。むしろお前たちにこいつの恋人になってほしい。私は仕事でする作り笑顔を作って見せた。

「あ、彼女じゃないから安心してください。写真撮りますよ？ 携帯かして」

彼女たちはえ、とか、いやだ、とかいって笑いながら私に携帯を差し出してきた。コーヒーの中に携帯を沈没させてやりたいのを必死にこらえながら、柳くんと彼女らのツーショットを何枚か撮った。せっかく座って植木に隠れていたのに、撮影のために立ったせいで柳くんはまた目立っている。店内の視線とざわめきを感じつつ、私はもう爆発寸前だった。長身の柳くんの隣に立ち、彼女たちは嬉しそうに「顔小さいんですねえ」「よく雑誌で見かけてて」などと、有名人に会ったときに小市民がする反応を、ステレオタイプに再現している。私も最初はああだったのだ。柳くんが本当に天使のように見えたし、まぶしいほどのイケメンに見えた。紛うことなきイケメンだった。

でも今は、私にとっては、ただの恋敵なのだ。

写真を撮影し、二、三言話した彼女たちは満足したらしく、ありがとうございました、と、なぜか私に勝ち誇った顔を見せた。残念ながらこの男は私の彼氏ではなく、私の彼氏の浮気相手なんですよと言ってしまえたら楽だった。

また植木の影に収まり、私たちはマグカップを手にする。

「ごめんね、南ちゃん、話が」

「ううん、いいよ。有名人は大変だね」

「そんな、俺なんかただのモデルだし」

「それでも、声かけられてるんだし、プロなんだから。彼女も作れないんじゃない？」

彼は困ったように笑った。私はすっかり冷めて苦みばかりがでしゃばってくるカフェオレを飲み、顔をしかめ、何度目かの深呼吸をする。心臓が飛び出しそうだ。

「あ——」

「俺、さ」

あんた、人の彼氏と浮気してんでしょ、別れなさいよ、何考えてんのよ、と、吐きだそうとして口を開いた瞬間、柳くんが言葉を紡いだ。察したのかと思うが、彼が語る言葉はそんな下世話な話ではなかった。

「こんな見た目でしょ。さっきも南ちゃん言ってたけど、いい意味でも悪い意味でも目立っちゃってさ、関係ないのに変ないざこざにしょっちゅう巻き込まれたりすんの。人によっては自慢かー、って、言われたりもすんだけどさ、けど、正直すごく、そういうことに巻き込まれることって怖くてさ。だって全然知らない男とかに突然掴まれて殴られそうになったりするの。だから、彼女中々作れないっていうか、作りたくないっていうか……」

暗くならないようにか、柳くんは努めて明るく振舞っているようだった。優しい瞳を私に向ける。どうして私にそんな瞳を向けることができるのだろう。彼からしてみれば、私は東樹の浮気相手になるはずだ。私が彼を憎いと思ったように、彼もまた、私のことを憎いとか殴りたいとか思わないのだろうか。私はだらしなく開いたままだった口を閉じ、手持無沙汰になってまた、苦いカフェオレをすすする。

「けどさ、俺がそう思っても、勘違いされて女たらしだって思われて引かれることもよくあってさ、一時期人間不信になったことも、あった。でも、そういうときでも、俺と友達でいてくれたのがアイダとか、東樹だったんだ。すごく感謝してる。あいつ、南ちゃんも知ってると思うけど、すごい、いいやつなんだ」

そんなことはわかってる。だから好きだし、付き合っている。いいやつだから、お人よしだから、あんたみたいなホモに引っかかっているんだよ、と言いたい。さっき飲んだカフェオレの苦みのせいで、舌の端がじわじわとしびれだす。

「……あいつ、南ちゃんのこと、すごく、大切に思ってるから。別に、これはほんとに、東樹に

言えとか言われてるわけじゃないよ？ 今日、俺たちが会ってることは、南ちゃんがあいつに言っていないなら知らないはずだから」

「……なんで、そんなこと言えるの？」

自然と出た言葉だった。柳くんは照れたように笑う。

「東樹のこと、まあ、ほんといいやつだなって思うし、その彼女の南ちゃんのこと大好きだからだよ」

柳くんはまっすぐ、屈託なく私を見る。ウォールナツツ色の瞳は鼈甲飴のようにも見え、美しく澄んでいた。

ステファノ、という名前の由来を以前尋ねたときに、キリスト教の最初の殉教者の名前だと教えてくれた。船津くんの誕生日パーティーだったか、東樹やアイーダが集まった飲み会だったか。そんなことが不意に思い出される。俺はそんなに信心深くないけど、自分の信仰のために死ぬ、っていう人と同じ名前なのがちょっと誇らしいんだよね、と言っていた。と思う。うろ覚えだ。私はただいい彼女に思われたくて、話を聞くふりをしながらも、どのタイミングで何か飲み物のおかわりはほしいかとか、料理は何を取ろうか窺っていた。でも、今思えば、ステファノとかいう真面目な人を誇りに思う真面目だろう柳くんが、まさか、浮気なんかするだろうか。しかも男と。

昨日の電話で彼の名が出たけれど、それまで私は東樹が浮気しているだろうと怪しんだことも、ましてや相手が柳くんだと思ったことは一度もなかった。そうすると、だんだんと、ここで彼を責めようとしていたことが本当は間違いなのではないかという気がしてくる。昨日のは聞き間違いで、少なくとも柳くんが相手ではないのかもしれない。柳くんを呼び出すよりも先に、東樹に相手のことを聞くべきだったかもしれない。ただ衝動で、何の気なしに交換した彼のアドレスにメールを送ってしまうより先に、こんな風に友人のことを大切にしている彼を呼び出すより先に、東樹と話をすればよかったのだ。笑顔で今日も家を出て行った彼を呼び止めて、今夜少し話がしたいと言えばよかった。一緒に暮らしているのだから、いつだって尋ねることはできた。そうしたら意外にも昨日のことはすべて夢で、たとえば柳くんと電話していたのは本当だったとしても、会話の内容までは私が夢うつつでいたから改ざんされたものだったかもしれない。好きと言っていたけれど、冗談だっていうこともあり得る。

私は急に自分がここで彼と向かい合っていることが、すごく愚かなことをした気分になった。自分の思い込みの激しさを悔い、自信がなくなり、恥ずかしさのあまり鼻に熱が集まってきて、汗がじわりと湧くようだった。

「大丈夫？」

しばらく黙って俯いていたからか、柳くんは私の右手の甲を指でつついた。はっとして顔を上げる。彼は申し分ないほどの綺麗な顔をして、透き通った瞳で問うてくるのだった。やっぱり間違いだったのかもしれない。人懐こい彼は、どんな人からも好かれるかもしれないし、東樹とは仲が良いかもしれない。でも、まさか、浮気をしているなんてやっぱり私の勘違いだ。だって彼は、こんなにも美しく、私を見つめる。これは真面目な殉教者の目だ。たぶん。

「うん、ごめん。ありがとう。大丈夫、かも」

「かもって何よ」

柳くんはふふ、と笑った。

結局、喧嘩じゃないと言ったけれど本当は仕様もない喧嘩が原因だと話した。ついでに、普段東樹に思っている鬱憤を吐き出すと柳くんは、東樹は変なところで頑固だからね、と、私に共感して見せるように言う。私もそうだね、と頷いて、カフェラテは少し残したまま席を立った。ふと、彼のカップを見ると、頼んだブレンドはなみなみと残っていた。飲んでいたように見えていたけれどお腹の調子でも悪かったのだろうか。

店を出るとすっかり日が暮れており、会社帰りのスーツ姿が増えていた。八月も終りに近づき、日中は蒸し暑さが陣取る街中も、日が落ちれば心地よい風がふわふわと漂っている。私は半袖にショートパンツという真夏の出で立ちだったが、隣に立つ柳くんは秋の新作らしいシャツを着ていた。濃い色のデニムも彼の足の長さを存分に見せつける。こんな人と東樹が付き合っているなんて、もちろん恋人の私からしても東樹はそれなりに恰好いいけれど、それなり、と、ホンモ

ノは違う、し、私はどうかしていたのかもしれない。男同士だって成り立つレベルがあるだろうに。柳くんが私の頭をぽんぽんと叩いた。

「今日、ありがとう」

「柳くん、そういうこと簡単にしない方がいいよ、女の子、柳くんのこと簡単に好きになっちゃうから、絶対」

「南ちゃんは俺のこと好きになんないの？」

「東樹がいなかったらねえ」

今日、店内で撮影をお願いしてきた女性二人を思い出す。確かに、彼の知らないところで勝手に痴情のもつれに巻き込まれても、彼の容姿なら仕方がないのかもしれない。

「.....柳くんの周りは本人が望む望まないにかかわらず女の子がたくさん集まってきちゃうんだよね。なんか、私、ほんとにバカみたい」

え、と柳くんが真顔になる。私の勘違いを彼に話すつもりはなかったが、思わずぽろりとかぼれた。こんな話し方だと私が柳くんを好きだと思われかねない。こぼれたものは仕方がない。彼が笑い話にしてくれたらそれでいい。

「あ、いやいや、私が柳くんのこと好きってわけじゃなくてね、本当は、今日のこと、本当はね、東樹と柳くんが付き合ってるんじゃないかって思ったの。ひどいでしょ？ 東樹の電話が浮気かなって思ったんだけど、柳くんの名前出して、好きとかなんとか言ってたから本当にそうだったら、って思って、思い込んで柳くん呼んじゃったの。ごめん。そんなわけないのにね。今日、柳くんと話して、東樹も浮気するほど器用なタイプじゃないし、柳くんとは到底釣り合わないし、そもそも男同士だし、だって、柳くんはきっと女の子からすごいモテるだろうし、まさかそこで東樹なんて地球がひっくり返っても選ばないでしょ？ なんで東樹なんだよって感じ、だー」

「……ねえ、じゃあ、なんで南ちゃんは東樹なの？

「え？」

「そんな風に東樹のこと言うんだったら、俺にちょうだいよ」

時間が止まったのに、彼のふわふわの髪の毛が揺れていた。

私は彼の言葉の意味が理解できず、顔を通りに向けたまま、行き交うサラリーマンたちの横顔を見つめた。さっきまで私たちがお茶をしていたカフェの明かりを背に浴びているので、サラリーマンたちは白く浮かび上がり、私たちの顔には濃い影が落ちている。私も柳くんもどんな表情をしているのかサラリーマンからは見えないはずだし、彼がモデルの柳ステファノだとばれることも、標準的な顔立ちの私が柳くんの彼女だと勘違いされることもないだろう。誰も私の顔色が悪いことなんて気づきもしないだろう。

自分の唾を飲み下す音だけがはっきり聞こえる。

「俺、正直言って女の子は嫌いじゃない。けど、南ちゃんだけはすっごい嫌い。なんでかわかる？ 東樹の彼女の癖に、東樹のこと大切にしないし。全然可愛くないよね。俺と東樹が浮気してるかもって思ってたんでしょ、でも、なんで俺が東樹選ぶんだよって思ったんでしょ、なんで東樹なんだよって思ったんでしょ。逆に聞くけど、南ちゃんはなんで東樹じゃないとダメなの？ そんな風に言うんだったら俺に東樹、ちょうだいよ。俺の方が何倍も何十倍も東樹のこと好きなんだけど。東樹も俺のこと好きだって言ってくれるし……言っとくけど、あいつも俺のことちゃんと恋愛感情で好きって言ってくれてるから。俺たち、ちゃんとしてるとこまでしてるからね。正直、俺は、南ちゃんと別れて俺と付き合っほしい。でも、東樹は南ちゃんのこと捨てるから、俺だって南ちゃんのこと大切にしようと思ってるよ。大切な人の大切な人だったら大切にするよ。俺の気持ちは我慢する覚悟ある、ぐらい、東樹のこと好きだから。でも、やっぱダメ。今日話してて思ったよ。南ちゃん、どうして東樹なの？ さんざん愚痴ってたよね、さっき。そんならもう、俺にまるっと渡してくれない？ 東樹と別れてくれない？」

柳くんは一息で言い切ると、私の答えなんか聞く気もないようで、歩き出してしまった。私は茫然として、足に力が入らず僅かに足も震える。180センチを超える長身の彼の背中はやんちゃと伸びて、私から遠ざかっていく。しなびたスーツの雑踏に紛れようとしても、否が応でも目立ってしまうのだった。私は三回、息を深く吸って走り出す。

「っ……待ってよ！」

柳くんの腕を掴むと、しっかりした筋肉が跳ね返してくる。彼はあっさりと立ち止まった。私たちの後ろから流れにのって歩いていた数人のサラリーマンや女性が私たちを避ける。人波の裂け目に私たちは立っていた。

「で、別れる？」

柳くんは私を見下ろした。びっくりするほど冷たい目をしている。顔が整っているから余計に作り物に見えた。こんな人を相手にして、私は何かできるだろうか。私は急に全身が粟粒だった。

「な、何言ってんの、そんな、急に、浮気、されてたんだよ、そんなの、あんた、男だし、別れてよ。おかしいじゃん、そんなの」

「あんたが浮気相手かもしんないじゃん」

「そ、んなの、」

声が震える。さっきまで目の前の彼が東樹の浮気相手だと思っていたときはあんなにも彼のことを責めたてたかったのに、一度戦意をなくしてからこんなことになる、どうにもこうにも頭がついて行かない。言語が出てこない。

柳くんはただただ私を見つめていた。天使のようなウォールナツツ色の瞳で、じいっと見据えてくる。迷いが無い。目を反らしたら負けると直感的にわかるものの、でも、この瞳には誰も勝てない。強い意志をもった瞳だった。

まるで、そう、信仰のために自分を捧げたステファノのような。

「なんで？ 立場は俺と一緒にでしょ。一方的に俺が引かないといけないの？ そういうところが嫌いなんだよね。女の子ってすごいわがまま。自分がいつも選ばれると思ってるよね」

はあ、と、柳くんはわざとらしく溜息をつく。平然と、たとえば明日の予定を話すみたいに言葉がぽんぽん出てくるから、行き過ぎる人は誰も足を止めず、こんな往来の真ん中で立ち止まって話しているなんて迷惑だ、ぐらゐの視線だけをよこしてくる。興奮か冷や汗か私のこめかみからは汗が一筋伝ったが、彼は涼しげに言う。

「ずっと、好きだと思った人には選んでもらえなかった。でも、東樹は俺を選んできた。長い時間かけて、お互い好きになってきたんだ。なのに、自分が女なのに選んでもらえるってすごく浅はかじゃない？」

「……っ……なんで、東樹なの？ ほかの男でもよかった、でしょ、なんで、」

「そんなのまるっと、あんたに返すよ。他の男でもよかったでしょ。俺は、東樹じゃなきゃダメだ。東樹の彼女だから、あんたのことも嫌いにならないようにしたし、会いたいときだって我慢したんだ。あんた、優遇されてるくせに、それが当たり前みたいな顔して、女だからって男に愛されるのが当然って顔して」

「そんなの、でも、男同士なんておかしい、でしょう、そんなの、だって」

あのねえ、と、彼は呆れ顔になる。

「じゃああんた、この世にヘテロセクシュアルしかいないと思ってんの？ まあ、女の自分が男の俺に負けるなんて思いたくないのはよくわかるよ。俺も悔しいし。あんたに負けたら……でもまあ、九十九パーセント、東樹は南ちゃんのこと選ぶと思うよ。だったら俺は……それで構わない。東樹の選んだことなら、俺はそれを受け入れるし。今から電話して聞いてみなよ。きっと

あんたに平謝りして、真面目に話をして、俺と別れるって言うと思うし、その後すぐに俺に電話してきて、泣きながら謝ると思うけど？ よかったね。ハッピーエンドじゃん」

そんなことすら平然と言う。柳くんがどんどんつかめなくなる。

「……何、それ、じゃあ、意味わかんない。ほんとに、東樹のこと、好きなわけ…？ そんな遊びみたいなこと、で東樹のこと、そっちに、引き込んで、」

飄々としていた柳くんが急に目を見開き、私の肩を掴んだ。大きな手につかまれ、当然のことながら、彼が男なのだと改めて思う。私の汗は止まらない。

「ゲイでよかった、って、思うのは、自分が好きな人と一緒になれなくっても、俺がゲイで、相手がノーマルだったから、分が悪かったって、言い聞かせられるからだよ。なんで俺はゲイなんだって嫌になるのは、俺が、こうじゃなかったら、あいつのこと好きにならなけりゃ毎回辛い思いなんてしなくて済んだのになら、いつも、自分を嫌いになりそうになるからだよ。あんたには、きっと、わかんないだろ。汚い化粧して、流行にも鈍感で、ただ愛されるのを受け入れるばかりの女には、わかんないだろ。でも、東樹は、こんな俺のこと受け入れてくれたし、俺に何度もあんたの存在のこと、謝ってた。でも、東樹があんたのこと好きだって言うなら、それで、いいんだ。俺は引き下がる。でも、あんたのことはきっと一生好きにはなれんだろうな」

彼の手からふっと力が抜ける。あーあ、と、また溜息をつく。私は足に力が入らず、ただただ立っているのに必死だった。

「……ごめん、ちょっと言い過ぎた。まあ、あいつのこと責めないで。同情しやすいタイプだから、俺が付け入ったんだ。……あんたと付き合うってなったとき、俺とは別れるって言ったのに、一緒にいたいって言ったのは俺だし、ばれないようにああしろこうしろっていったのも俺だし。安心しなよ、あんたのこと、選ぶから」

「柳くん、」

「いつ言われるんだらうって思ったら、全然言ってこないから緊張してコーヒ一飲みそびれたよ。今日本当はその話に来たんでしょ」

私は小さく頷く。なぜかすごく泣きそうになって、あまりしっかりと頷くと涙があふれてきそうだった。

「じゃあなんも問題ないじゃん。俺が身を引くからいいよ」

「……柳くん、」

「あーあ、なんかあっけなー。ゲイ同士だともっとさー」

「柳くん！」

柳くんは口をつぐみ、じっと足元を見つめた。

「柳くん、それでいいの……？」

「は？ 別れろっていったの、南ちゃんでしょ。まあ、南ちゃんの言うことは聞きたくないけど、東樹の決めたことに従うよ。俺はもちろん別れたくないけどね。東樹のこと、俺は本当に好きだから。前に話したよね？俺の名前の由来になったステファノは、信仰のために自分の命を賭すことも厭わなかったんだ。だから俺も、自分の信仰のために自分の身を捧げるよ」

彼はじゃあ、と小さくつぶやいて一步踏み出した。そして首だけ少しひねって私を見る。

「あ、俺と別れたら、ちゃんと付き合い続けてよ。俺にはよさがよくわかんないけど、東樹あんたのこと好きみたいだし。俺と関係持ってたからって、東樹と別れたら許さないからね。そんなことするんだったら俺に東樹をちょうだい。じゃ、ね。もう、俺の連絡先消してね。俺は、もう消してあるから」

最後に、彼はあの人懐こいとびきりの笑顔を私に向けてきた。数人が柳くんとすれ違って振り向く。颯爽と歩く柳くんの後姿は、ランウェイを歩くモデルのようでとびきり美しかった。私が東樹と付き合う権利を、最初から最後まで渡されたままだったのに、ずっと負け通しだった。

私は立ち尽くしたまま、ショルダーバッグからスマホを取り出した。緊張のせいかじっとりと汗をかいた指先では、上手く画面をタップできない。暗証番号を二回間違えて三回目でロックが外れる。手が震える。発信履歴からすぐに東樹を見つけ、発信ボタンをタップする。声がうまく

でるか心配だった。

できれば、今、東樹には電話に出てほしくなかった。出るんなら全部ウソだと言ってほしかった。夢だと言ってほしかった。三日前の電話も、柳くんとの関係も、全部ドッキリだよと言ってほしかった。私のことを、柳くんのように東樹のためにあれほど気持ちを押し殺せない私のことを、東樹には選んでほしくなかった。私は、誰かのために殉教なんてできない。

「もしもし。東樹？」

「ん、どうした？ 今ちょうど仕事終わったけど、夕飯まだ作ってないなら外で食う？ 最近会ってないし、アイーダとか柳も誘おっか？」

東樹、あんたは誰のためなら殉教できる？

END

殉教

<http://p.booklog.jp/book/90378>

著者：こんにやく

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/mokokiko/profile>

表紙イラストお借りしました

はこ：<http://hacoism.ame-zaiku.com/index.html>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/90378>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/90378>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ